

月刊



Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会 (日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 120 年)



読売国際会議 2023 「日印協力が果たすべき役割」

(写真提供：読売新聞社)

目次

読売国際会議 2023 「日印協力が果たすべき役割」	P. 3
インド商工会議所連盟 FICCI 国会議員フォーラム代表団 7 人が菅義偉会長を訪問	P. 4
第 28 回 ナマステ・インディア 2023	P. 5
日印協会主催 講演会 「山田真美が詳しく解説！ 最新インド情報」	P. 6
「声」によるインド理解～ネット大学の可能性	P. 7
インドニュース(2023年9月)	P. 11
新規法人会員のご紹介	P. 17
新刊書紹介	P. 17
イベント紹介	P. 19
掲示板	P. 22

広告削除後、目次とページを合わせるために空白ページをいれております。

読売国際会議 2023 「日印協力が果たすべき役割」

Yomiuri International Forum 2023

“India-Japan Relations: The Way Forward,”

9月13日、読売新聞と読売国際経済懇話会主催で、読売国際会議2023「日印協力が果たすべき役割」が、東京・内幸町のイノホールで開催された。この会議は「日印の連携・協力が、インド太平洋の安全保障や世界経済の回復にどのような貢献をもたらすか」について話し合うもので、日印協会からは来賓として菅義偉 日印協会会長、パネリストとして齋木昭隆理事長が参加した。

主催の老川祥一読売新聞グループ代表取締役会長のご挨拶後、菅義偉日印協会会長が、「インドは法の支配にもとづく自由で開かれた国際秩序を維持・強化するための鍵」「日印協会としても政府の取り組みを後押しし、関係発展のために積極的に貢献する」と挨拶された。



(写真提供：読売新聞社)

次のセッション1「グローバル・サウス の大国インド」と『自由で開かれた インド太平洋』では、齋木理事長のほか、シビ・ジョージ駐日インド大使、細谷雄一慶應大学教授が参加した。概要のみお伝えする。

シビ・ジョージ駐日インド大使は、「G20 首脳会議では、インドが議長国として『一つの地球、一つの家族、一つの未来』をテーマに掲げ、アフリカ連合を G20 の恒久的メンバーとして迎え入れた。岸田首相が訪印した際には、『自由で開かれたインド太平洋』を強調し、モディ首相も海上交通路の安全性や法の支配の必要性に言及した。世界の多極化の中で、インドと日本のパートナーシップが重要であり、1,500社の日本企業が活動している現状を15,000社に増やすことを目指す。双方が互いに必要な存在であり、政治やビジネスの分野で大きな進展が求められている」と話された。



齋木昭隆日印協会理事長は、「G20 でのモディ首相の卓越した指導力が高く評価され、特に巧妙な外交手腕によってロシアと中国に対処したことが評価される」「地政学的な位置や経済的成長に注目しつつ、インドが『東西』『南北』の結節点に位置し、国際社会の重要課題に果たすインドの役割は大きくなっている。特に、人口14億人を超え、若い平均年齢と経済成長を誇るインドが、8月に探査機を月に着陸させるなど最先端の科学技術分野でトップクラスに到達したのは明らかだ」

「インドは多くの友好国とのネットワークを築き、安全保障を確保するために努力している。その中でも日本とインドの両政府は、自国にとって相手が大事だという認識を共有している。一方、両国の議会や経済界、言論界、学界は対話を行なって連携を強化していく余地がまだまだある。両国には豊かな文化と長い歴史があり、非常に誇らしく思っている。政府レベルだけではなく、色んな分野で互いに意識し合い、協力していくべきだ」

「日本が日印協力で果たす役割については、経済的繁栄の前提は平和であり、平和と繁栄をいかに確保するか、日本とインドが声を一つにして世界に訴えることが大事だ。」と述べた。

細谷雄一慶應大学教授は、「国際秩序は二つの側面から大きな変化が起きている。一つは、欧米中心だった秩序がグローバルに広がり、G20 首脳会議ではインドがリーダーシップを発揮し、今後はブラジルや南アフリカも影

響を与えるでしょう。二つ目は、第二次世界大戦後の大西洋中心の舞台からアジア太平洋へと移り、インド太平洋が国際政治の中心となっている。これに米国、日本、オーストラリアを加えると QUAD になる。日本とインドの協力が、これからのインド太平洋の時代を作っていく。単なる二国間関係を超え、歴史的な意味を持った変化の中で、特別な重要性を帯びている。」と話された。

この後、セッション2「インド経済の発展と日本のチャンス」と続いたが、両セッションとも「日印協力が果たすべき役割」についての熱い語りが残るシンポジウムだった。 (日印協会 山本真里枝)

インド商工会議所連盟 FICCI 国会議員フォーラム代表団 7 人が 菅義偉会長を訪問 Seven FICCI Parliamentarians Courtesy Visit to JIA-Chairman

日印協会 副理事長・常務理事 西本達生

菅義偉会長は、10月11日(水)午後、インド商工会議所連盟 FICCI の上院・下院国会議員による表敬訪問を受けた。去る7月に菅会長がインド訪問時に、同議員連盟とミーティングをおこなったその答礼としての表敬を受けたかたちである。

先方は、

Shri Rajiv Pratap Rudy, MP-Lok Sabha, BJP, Bihar ビハール州選出を団長に、

Shri.Sushil Kumar Modi, MP-Rajya Sabha, BJP, Bihar ビハール州

Ms. Sangeeta Azad, MP-Lok Sabha, Bahujan Samaj Party, UP ウットタルプラデシュ州

Shri Hemant Patil, MP-Lok Sabha, Shiv Sena, Maharashtra マハラシュトラ州

Ms. Ramya Haridas, MP-Lok Sabha, INC, Kerala ケララ州

Shri Beeda Masthan Rao, MP-Rajya Sabha, YSRCP, Andhra Pradesh アンドラプラデシュ州

Mr. Jayant Singh, MP-Rajya Sabha, RLD の7名の議員と、FICCI 会長の Mr. Subhrakant Panda, MD of Indian Metal & Ferro Alloys Ltd. および FICCI 事務局長 Mr. Shailesh K Pathak ほか随行者、計13名と、インド大使館および外務省南西アジア課も同席された。



挨拶もそこそこに、菅会長からは、7月インド訪問時にモディ首相に、日系企業がもっと進出しやすい環境を整えるよう要請したことを話し、それに対して FICCI 議員連盟からは、我々はそのようなテーマについて議論するには最もふさわしいカウンターパートだ。日系企業にも最も多く加盟いただいている。日系企業が直面する課題を整理し取り組んでいきたい、と応じた。

また菅会長は、なかなか進まない日本とインド間の人的交流も取り上げ、若者同士の人的交流についてはそれぞれの議員さんの出身州レベルで学生交流を取り組みたいとするなど、具体性に富んだ応答があった。

最後に菅会長に、心のこもった紺色のパシユミナが掛けられた。(右写真)



第28回 ナマステ・インドア 2023

Namaste India 2023

◆ 第28回 ナマステ・インドア 2023

9月23日(土)、24日(日)の2日間にわたり、日本最大級インドフェスティバル「ナマステ・インドア 2023」(ナマステ・インドア実行委員会 / NPO法人日印交流を盛り上げる会主催)がコロナ禍を経て4年ぶりに代々木公園イベント広場で開催された。

今年で28回目。初回は1993年に旧商工会議所ビルのホールで始まり、その後場所を変えながら、年々規模を拡大し、今では日本最大だけでなく、インド国外最大ともいえるインドフェスティバルになっている。

前日、東京は大雨になり開催を心配されたが、開会式が始まる10時半には雨も上がった。加えて9月になっても続いていた暑さがおさまり、秋めいた過ごしやすい気温となった。

開会式には、主催の長谷川時夫氏、シビ・ジョージ駐日インド大使、ジョイス・シビ令夫人、日印協会 大間知慎一郎副会長(三井物産株式会社 顧問)が出席され、全員でインドの伝統儀式的点火式を行った。

インドというと多様性という言葉で表されるが、このお祭りでそれが実感できる。飲食、レストランテントでは、インド北から南、本格的なものから、日本人に合うようにアレンジされたさまざまなインド料理、スナック、インド産ワインやチャイなどを楽しむことができる。23日の午前中は、前日の雨のせいなのか、買い物もしやすかった。二日目の24日は、朝から多くの人を訪れ、食事を求める長い列ができていた。また、サリーやパンジャビスーツ、インド食器、お守りなどのお店、アーユルヴェーダヘッドマッサージや占い関連も盛況の様子だった。

主催側に確認すると、1日目8万人、2日目12万人が来場したそう。

野外のステージでは、千人近くの応募から選ばれた日印アーティストの200グループが、古典舞踊、ボリウッドダンス、楽器演奏、ヨガなどが披露され、それだけでも一日中楽しむことができた。

また、受付、ゴミの分別、トイレ管理などで多くのボランティアの方々が裏方で活躍していた。

私は、シビ・ジョージ駐日インド大使が、大間知慎一郎副会長、西本達生日印協会副理事長と一緒に、飲み物を手にテントの一つ一つを周り、お祭りを楽しんでいらしたのを何度もお見かけした。



日印協会も場所をお借りして、協会の活動の紹介など行った。普段は外に出て行かない協会だが、多くの方々に存在だけでも知ってもらえたと思う。

後日談だが、10月6日にインド大使館で開催されたイベントで、ジョージ大使がナマステ・インドアの主催者の長谷川時夫氏に感謝状を渡していたのを拝見した。来年もナマステ・インドアが楽しみだ。



ナマステ・インドア 2023 開会式
左より長谷川時夫氏、ジョージ駐日インド大使、
大使ご夫人、大間知慎一郎副会長



◆ 日印協会主催 講演会「山田真美が詳しく解説！ 最新インド情報」



山田真美先生
インド工科大学ハイデラバード校
教養学部客員准教授
公益財団法人日印協会理事

9月23日(土)13時半より、日印協会主催 講演会「山田真美が詳しく解説！ 最新インド情報」を開催した。今年は、ナマステ・インドア主催者の都合で、この講演会を行うはずだったセミナーハウス設営が中止となったため、場所は、ナマステ・インドアの会場の外の「Time Sharing 渋谷神南」での開催となった。

山田先生がこのナマステ・インドアで日印協会主催講演をするのは10回目。面白く、楽しくインドを学べるこの講演会を毎年楽しみしているお客様や、ナマステ・インドアの日印協会テントで初めてこの講演会を知ったインド好きのお客様で会場はほぼ満員となった。

はじめは、今年8月に先生が招待された、インド政府が14カ国、575人を招待した、インド・ボパールで開催された「国際文学祭ウンメーシャ 2023」から、インドの言語についてのお話。インドでは、公用語は2言語、指定言語は22言語、紙幣には17言語が表記されているが、780~880の言語が存在し、そのうち197言語は絶滅が危惧されている。単一言語の日本からは想像もできない話だった。

次は先生が今年3月に訪れた「インド北東部」について。北東部とは、アルナーチャル・プラデシュ、アッサム、ナガランド、メガラヤ、マニプール、ミゾラム、トリプラの七州にシッキムを含めた八州を指し、七姉妹(シッキムを含む八姉妹)と呼ばれる。最近急速に開発が進んでいるが、戦争の爪痕が残る地域も多い。

先生が多くの写真を見せながら、また恒例のクイズ(正解者には賞品つき)を出しながら話を進める。

ナガランド州に、日本の大日本帝国陸軍人、佐藤 幸徳(さとう こうとく、インパール作戦において、軍司令官の牟田口廉也中将と対立し、作戦途中で師団長による独断退却を行ったことで知られる)が住んだ家に今も現地の人が住み、現存している。その時代を知る老人の話では日本軍は現地の人にとっても礼儀正しく悪いことは何もなかったようだ。

マニプール州の説明で先生が出したクイズも私の心に残った。この老人が指差す先には何があるのか。答えは日本軍の遺骨。この老人の話では自分が死んだら遺骨の場所はわからなくなってしまうので、早く取りに来てほしいと言っていたようだ。



マニプール州のお話で、「この老人が指をさして教えてくれたものは？」
山田真美氏撮影

この日の午前中には雨が降っていたので心配したが、多くの方に参加していただき、笑い声で溢れる会場の雰囲気、参加された皆様がこの講演会に満足していただいたのを確信した。

山田真美先生、ご多忙のなか、講演を引き受けていただきありがとうございました。(日印協会 山本真里枝)



「声」によるインド理解～ネット大学の可能性

Understanding India with Voices

1000-day report on “Impact of India”

個人会員 近畿大学教授 広瀬公巳

インドがますます注目されるようになってきた。政治、経済、社会、文化など、インドについて語る人も増えてきた。筆者は長年、NHK の記者・解説委員をしてきたが、メディアの世界でもインドについて扱われることが以前より頻繁になり、情報の質も徐々に向上しているように見受けられる。インドについてより多くの人を知りたいと思うようになっているのは大変結構なことだ。日本におけるインド理解が「大衆化」する中で、これからどのような形で日本人のインド観が形成されていくのか。筆者が取り組んでいる「インドの衝撃」という新たな取り組みと、そこから見えてくる「声」によるインド理解の可能性について述べていきたい。

1. 千夜一夜のネット談義

「インドの衝撃」はインドに関する市民大学だ。カレー、ヨガ、アーユルヴェーダ、映画、音楽、国際ビジネスから国際関係まで、あらゆることでインドを学ぶ。声を出して、教え教わるという関係から人と繋がり、それぞれが何かの気づきを見つけることを目指している。

市民大学とはいっても校舎はなく、語り場の舞台はサイバー世界の中にある。具体的には、Clubhouse という音声アプリや、旧ツイッターの X、Zoom による WEB 会議などを 2021 年の 2 月 8 日から毎晩原則 1 時間というルールを設け、連続で 950 夜（この原稿の執筆時点）続けている。

参加しているのは、インドを知りたい日本人、在インドの日本人、日本語をインドで学んでいるインド人などで、参加人数も、その日によって様々で数人から多いときには数十人までになる。

音声アプリの Clubhouse の中での「インドの衝撃」にグループ登録している会員数は 300 人（同上）、さらに音声コミュニケーションを文字や画像情報で補完するものとして設けた LINE のオープンチャット「インドの衝撃」には 200 人（同上）近い登録者があり、インドに関するイベントや気になるネットの新しい情報のリンクなどが毎日数件アップされている。

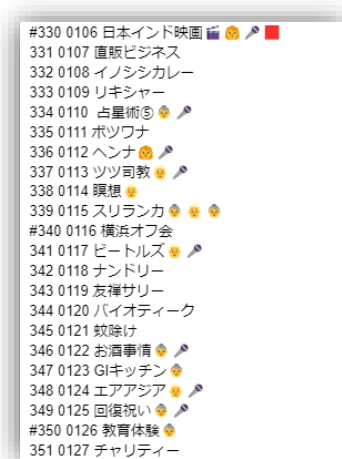


Spotify やアップルPodcast など
全世界でいつでも視聴可能

語り場にゲストとして招かれた人のまとまりのあるお話は、Podcast と YouTube に残し、いつでもインドについて知りたい人が肉声の情報を無料で聴ける状態にしている。そのライブラリーはすでに 400 件を超え、「インドの衝撃」ホームページには、過去にどんな話題が話しあわれたのかを参照するための一覧表を掲示している。インドについて紹介してくれる主なスピーカーについては、インド大学の講師陣として経歴や連絡先をまとめてホームページに掲載した。

以上が「インドの衝撃」の概要だが、スマホや PC 上で行われていることなので、言葉で説明するより文末に記したリンクから使ってみていただくほうがわかりやすいのかもしれない。要はネットの力をフルに使って日印の市民の声によるインド紹介を無料でやっているというものだ。

そこではどんなことが話題にされているのか。1000 件近いテーマをここにすべて記すことはできないが、例えば、インド在住のある女性がインド綿カディの魅力やインドの精神性にも触れながら語ってくれたり、日本インド学生会議の学生たちがインド人の学生との交流の体験について話してくれたりした。抹茶のビジネスを始めたいという人、管楽器バンスリー奏者、チャイのお店をこれから開くという人、オランダでインド哲学を学ん



“語り場”のテーマ一覧（抜粋）
「インド大学」HPより

でいる人など次々に話は展開していく。

ジャイプールの宝石商、インド人と結婚された女性、インド女性の力で下着を作っている人、ヨガニードラをオーストラリアで指導している人、それぞれのお話の後には質問タイムがある。インド駐在を始めたばかりのビジネスマン、ヨガの修行者、マクラメ・アーティスト、ロンドンのインド街に詳しい人、オートリクシャーを日本で買った人、カレーを毎日8年間食べ続けている人、女性のシタール奏者。本当に多種多様でそれぞれに物語や驚きがある。

2. 千夜までの道のり

一昨年(2021年)の2月にこのインドの語り場を始めた時には、実はほとんど人が集まらなかった。初期の十数回は、筆者自身が一人で誰も聞いていないサイバー空間に向かってインドについて呟いていた。ところがほどなくリスナーが現れ、その数が少しずつ増えていった。「これは面白い!」と思ったのだが、今度は自分で話せるネタが尽きてしまった。そこでゲストを呼んできてお話を聞くという形式が生まれた。これが大当たりで次々と様々な分野からのお話が聞けるようになり、テーマの幅と質問タイムの参加者の積極性も向上していった。

日本語教師、ボリウッドダンサー、ネパールやブータンなど周辺国の日本人、ヒンディー語の歌を紹介してくれる人、OL系 YouTuber、宗教儀式プージャについての解説、インドのパン屋さん、インド映画ファン、占星術の研究者など様々な人の協力で「インドの衝撃」は千夜一夜の繋がりを維持してきた。ご協力をいただいた皆様には、改めてお礼を申し上げたい。

毎晩1時間の話をするわけだから、スケジュールの上でも体力の上でもそんな簡単なことではない。出先にいるときには、冷たい風が吹く町の中を歩きながら、司会・進行役をしていたこともあるし、周囲の音がうるさくない場所に移動するまで参加者に開始を待ってもらわざるを得なかったこともある。不謹慎ながら、うっかり寝過ごしたことや途中で寝落ちてしまったこともある。そんなときには仲間となったメンバーの誰かがいつの間にか喋り場を立ち上げてくれていた。ありがたく、嬉しいことだった。筆者が欠席すると風邪でもひいたのかと心配していただいたこともあった。

話題になるネタがない時には、インドに関する新刊書や必読書を紹介した。インド以外の話をすることも多い。周りに人がいて声を出せない環境にいる人もいるのでそんなときはチャットだけでトークする。それでも話題が切れたときの鉄板のテーマはカレーの話だ。話しているうちに腹がすいてきて調理を始めてしまうこともある。映画の話も盛り上がる。食と映画は議論の火起こしにも使える必須のテーマだ。ほかにもチャイムや効果音を利用したり、オンラインクイズアプリを使ってゲーム感覚でインドの基礎知識を競ったり、毎日飽きずに続けるためのノウハウもメンバーが知恵を出しあいながら磨かれていった。

3. オンラインからオフラインへ

ネット上で知り合ったインド仲間が集まってオフラインのミーティングも企画された。サイバー世界で知り合った全くの見ず知らずの人達がリアルで対面する。「インドの衝撃」の通称「オフ会」は現在も2か月に1回程度の頻度で継続中である。一緒にカレーを食べたり映画を見たり、インド関連の施設を一緒に遠足のようにして見て回ったりした。



メンバーによるシク教寺院見学
(Guru Nanak Darbar Kobe 神戸市)

横浜霧が丘のインド人が暮らす地域を訪れたり、神戸のシク教の礼拝施設グルドワラや、大阪にあるイスラム教のモスクを訪ねたりしたこともある。団体で訪問することによって、施設側にとっても説明を一度で済ませてもらえるなどのメリットもあると感じる。今後は、こうしたオフラインの活動もまとめてHPなどで紹介できるようにしたいと思う。

「インドの衝撃」には様々な専門家の先生方も参加してくれた。アミタヴ・ゴーシュの著作『飢えた潮』を翻訳され方、インド仏教について大学で教鞭をとっておられる先生や、アーユルヴェーダについての文献研究者、そして有史以前のインド文明についての考古学者の先生など、大学に入学したり有料の講演に出席したりしなければ聞けないような方のお話しを聞く機会にも恵まれ、参加者側は素人の視点から率直な質問をした。コロナ感

染拡大でオンラインの活動が活発になった時期と重なったことも音声アプリが普及した原因で、声だけによるコミュニケーションに対する抵抗感が少なくなっていた。

そしてこの語り場所を続けていく上で一番ありがたいのがインド人の方々の参加だ。インドの神々について教えてくれるインド人、ヒンディー語の講座もあれば、タミル語の入門講座をしてくれるインド人の方もいた。インド人ビジネスマン、日本企業で働くインド人、日本語を勉強している学生、日本のアニメが大好きだという人、様々なインド人が参加し、インドの言葉や習慣、風俗などの現地の生の正しい情報を教えてくれた。日本に来た経験がないにも関わらず日本語を流暢に話すインド人が増えている。日本ではまだ馴染みのないヒンドゥー教のヨガの核心部分について、誰かが初歩的な質問をすると、それに対する分かりやすい答えを参加者全員が共有することができるのは貴重な場だ。

まだまだ日本で得られるインドの情報は限られていて、間違っていたり全体像を捉えていなかったりすることもある。その時に現地のインド人に直接、現場の情報を聞けるので筆者自身、ジャーナリストや研究者としても非常に有力な情報源になっている。インドの方から直接お話を聞くために、語り場の使用言語を英語にしていたこともある。1時間、顔も見たこともない人たちとのコミュニケーションの司会進行は、本当に脳のエネルギーを全て使い果たす過酷なオペレーションだったが、同時に新たな気づきを見つげられる貴重な時間でもあった。

「インドの衝撃」を通してお知り合いになった方々に、筆者が勤務している大学授業でゲストとして講義をしていただいたこともある。ウッタラカンド州在住の料理研究家の女性には、立教大学や近畿大学で生中継オペレーションをしていただき、インドの家庭料理の調理方法やその背景インドでの暮らしと家族関係などについて、学生からの率直な質問に答えていただいた。慶應義塾大学との合同授業では、インドのカレーの魅力について英語での授業を行った。直接インド在住の方の実感を聞く機会となり、学生たちの反響もすこぶるよかった。



料理研究家と Zoom で結んだ
(近畿大学と慶應義塾大学の合同授業)

こんなに充実した内容を提供してもらっているのに、報酬はお支払いしていない。すべて無料である。日本の若い人たちにインドを理解してもらえれば、という好意に甘えている。

台湾の大学でインド音楽を教えているエスラジ(インドの擦弦楽器)奏者の方には、ターラやラーガといったインド音楽の基本について実演を交えながら分かりやすく中継解説していただいた。インドのことはほとんど何も知らない学生たちにとってインド音楽の魅力を直接知るよい機会になったのではないかと考えている。奏者は台湾で著名なミュージシャンなのだが「インドの衝撃」の趣旨に賛同していただき、こちらも特別に無償で演奏を披露していただいた。

4. 日本でのインド世界の「大衆化」

「インドの衝撃」がなぜ千夜も続いたのか時々考えることがある。インドがまだまだ知られていない国だということももちろんある。それ以上にやはりインド世界は到底、千夜程度では語り尽くせるような小さなものではないということなのかもしれないとも思った。改めてインドという世界の奥深さ広さを実感している。

インドの奥深さは私たちをいろいろなところに連れていってくれる。多くの見知らぬ人との出会い、かけがえない言葉、楽しく過ごす時間、閉塞感から脱げ出す自由な発想、おいしいカレーの味。そのインドの魅力に気づいている人が今、着実に増え始めている。昔からインドには人々を集める集客力があり、インドという人が集まってくる。今まではそれが物珍しさに偏っていたところあったかもしれないが今のインドブームの根幹には、リアルなインドを体験したい経験したいという気持ちがある。

2022年～2023年の「インドブーム」の一つの大きなきっかけになったのが『RRR』というインド映画の日本での公開だ。インドの神話世界と現実のエンターテインメントの面白さをうまく組み合わせたラージャマウリ監督作品だが、筆者が監督を初めてテレビで紹介したころは、まだまだインド映画もポピュラーな存在ではなかった。ところが最近、TBSの「日立 世界ふしぎ発見」、日テレの「世界の果てまでイッテQ!」など民放キー各

局が『RRR』に関連したゴールデンタイムの番組を放送し、『RRR』以外でも、運送会社のインド現地での奮闘ぶりを扱った番組や、ラクダの毛刈りや川渡りを追ったもの、音楽を軸にした旅紀行番組など、放送される機会が頻繁になり、番組のすべてを観つことができないほどになってきた。

筆者はこれを日本におけるインド世界の「大衆化」なのではないかと考えている。一部のインド関係者やインドファンだけでなく、主婦、学生、サラリーマンなど様々な人々がインドを楽しむようになってきた。「私だけ」のインドが、「みんな」のインドに変化している。

特に今年はG20の議長国として国際場裏での立ち位置が多くの人々の関心を集め、片面探査プロジェクトを成功させたという視覚的にも注目を集めやすいニュースもあった。こうしたタイミングの良さとも重なり、インドへの注目度が急速に高まることになった。長くインドを追いかけてきた身としては、一時の盛り上がりが終わってしまわないことを願う。

筆者はNHKの報道記者が出身なのでもともとインドの専門家ではなかった。NHKの解説委員としての仕事は行ってきたが、実は一生の生業としてインドについて研究を続ける自信がなかった。そんなときに出会ったのが南インドの研究者で東京大学名誉教授をしていた辛島昇先生だ。存命中にインドの国家勲章のパドマ・シュリー賞を受賞され、その授賞式が2013年に東京で行われた。先生に一つだけ教えてほしいと言って聞いたことがある。「インドを長く続けるコツのようなものはありますか」。先生はこう答えてくれた。「一人でやらないことです」。

一人では道に迷うことがあったり好奇心が途切れてしまったりするようなこともある。しかし、インドというキーワードで引き寄せられた人々が、それぞれの自身の中のインドの魅力を共有することでインド世界は広がり続ける。毎晩の語り場の「インドの衝撃」も長く続いていることによって、日本にいて途切れそうになるインドへの関心がよみがえる。同じようにインドが好きであったり関わりたいと思っていたりする仲間がいて、続けることができるのだ。

5. 声による「日印文化会館」

語り場の呼び名となっている「インドの衝撃」というのは、筆者がNHKの報道記者時代に担当したNHKスペシャルのタイトル「インドの衝撃」から取ったものだ。2007年に第一回が放送されたシリーズは、IT大国としての存在など番組内容も驚きに満ちた「衝撃」だった。テレビ番組は一方向のメディアだが、喋り場の「インドの衝撃」は双方向で時間と価値を参加者で共有できる。

テレビジャーナリストの大先輩である磯村尚徳氏は、記者としての現地での経験を経て、日本とフランスを文化で繋ぐ日仏文化会館を作った。実は筆者はインドと日本を結ぶ日印文化会館を作りたいと思っている。もちろんこれには予算や各国政府との調整など様々な難しい作業があり、一個人の力でどうなるものでもない。ただ立派な建物を作ることにこだわる必要は何もない。体裁はあとでもよい。サイバー空間では、声の日印文化会館の自主授業がすでに千夜近く続いている。今夜も「インドの衝撃」のチャイムが鳴る。誰が参加してくれるのか、それは始まってみないと分からない。誰からも参加費や授業料はいただかない。参加の資格は「インドについて知りたい、もっと知りたい」という気持ち。それだけだ。(了)

参考URI)

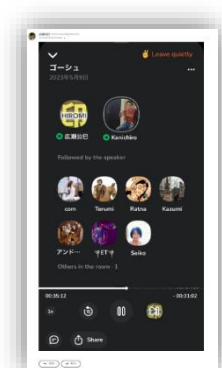
https://www.clubhouse.com/@hiromi_hirose Clubhouse 「インドの衝撃」ホストアドレス

https://line.me/ti/g2/V4wOAt8-z4N_1JDuVQ5bSQ?utm_source=invitation&utm_medium=link_copy&utm_campaign=default

LINE オープンチャット 「インドの衝撃」

<https://open.spotify.com/show/36zWNCvczjYDShgfJ98fWA?si=ZVLNqgnzRx2aAOU5FfSyMg&nd=1> Spotify 「インドの衝撃」HP

ひろせ・ひろみ：大阪出身。NHK元ニューデリー支局長・解説委員。岐阜女子大学南アジア研究センター特別客員教授、関西日印文化協会理事、日本南アジア学会会員。 <https://jibaku.info/>



「語り場」のアプリ Clubhouseの画面より



「インドの衝撃」
(リンク集QRコード)

インド・ニュース (2023 年 9 月)

News from India

1 内政

(連邦レベル、2024 年総選挙)

- 1 日、野党連合 I.N.D.I.A は、2024 年の総選挙を「可能な限り」共に戦うと発表し、議席配分について I.N.D.I.A 内の政党間で州ごとに協議するとした。
- 2 日、連邦政府はパンチャヤット、州議会、連邦下院の同時選挙の実施を検討し、勧告を行うためのコヴィン ド元大統領率いる委員会を設置。8 人のメンバーには、シャー内相、元上院野党リーダー・アザド氏、カシア ヲ元下院事務局長、弁護士のサルベ氏等が含まれる。連邦政府は同時選挙について「国益」にかなうと主張した。
- 3 日、モディ首相は Press Trust of India (PTI) によるインタビュー中、9 年間の「安定」と「決定的な信任」 に裏打ちされた改革の実績を語った。
- 3 日、連邦政府が同時選挙開催の実現に向けた委員会設置を発表した翌日、カルゲ・ kongress 総裁は「一 国一選挙」はインドの連邦制を解体するための策略であると発言した。
- 5 日、「一国一選挙」の委員会が設置される 5 か月前に、法務省は選挙管理委員会に対し 2024 年と 2029 年の 同時投票に必要な電子投票機について照会し、シナリオを作成していたことが明らかになった。
- 5 日、ムルム大統領からの G20 晩餐会の招待状に、通例の「インド大統領」ではなく「バーラト大統領」と記 載されたことから全国的な議論が巻き起こったが、BJP は、バーラトは憲法の一部であり、バーラトを使用す ることに問題はないと主張した。
- 6 日、ソニア・ガンディー・ kongress 議長はモディ首相に対し、9 月 18 日から 22 日に開催される臨時 国会において、中国との課題やアダニグループの不透明な投資問題、マニプール、失業などを議題として取り上 げるべきだと提案する書簡を送った。
- 6 日、6 州(ジャールカンド州、ケララ州、トリプラ州、西ベンガル州、ウッタラカンド州・ウッタル・プラデ シュ州)7 選挙区における補欠選挙の投票が終了。
- 2024 年総選挙に向けて新たに結成された野党連合 I.N.D.I.A にとって初の選挙活動となった 9 月 5 日の 6 州議 会 7 議席の補欠選挙において、8 日に開票が行われた結果、I.N.D.I.A は 4 議席、BJP は 3 議席を獲得した。
- 世界ヒンドゥー協会 (Vishwa Hindu Parishad, VHP) の中央事務局員会議が 9 日よりアヨーディヤで開始さ れた。来年 1 月に完成予定のラーム寺院で実施される「遷霊祭」に合わせ、同協会が国内全土で展開するプログ ラムにつき議論がなされた。
- 11 日、BJP は、2024 年総選挙キャンペーンを管理するため、全国に 300 のコールセンターを設置するプロセ スを開始した。9 月 1 日にシャー内相が開いた会議では、国内を 10 ゾーンに分け、各ゾーンにキャンペーンを調 整・管理する担当者を任命する計画が話し合われた。
- 12 日、BJP は、9 月 17 日のモディ首相 73 歳の誕生日に合わせ、インド全土で、困窮者へのアウトリーチや、 伝統工芸職人支援、及び遠隔地等への医療サービス普及等に取り組む旨を発表した。
- 13 日、連邦下院事務局は、18 日から開催される臨時国会において、インド憲法の制定に向けた憲法定議会 から今日までのインド議会の道のりとその成果、経験等につき議論を行う旨を発表した。加えて、「選挙管理委員長 及びその他選挙管理委員 (任命、勤務規則および任期) 法案」などの 4 つの法案が審議される予定。
- 13 日、野党連合 I.N.D.I.A は、州レベルの選挙における議席配分を画一的な方策によらずに開始することを決 定した。
- 9 月 18 日から 22 日に開催された臨時国会中、連邦下院と州議会の 33% の議席を女性に留保することを求める 憲法 (第 128 回改正) 法案が、下院を通過した翌 21 日、上院において全会一致で可決された。
- 21 日、連邦政府と選挙管理委員会は、議員の任期が一年未満になることからハリヤナ州アンバラ選挙区、マハ ーラーシュトラ州プネー選挙区、同州チャンドラプル選挙区、ウッタル・プラデシュ州ガジプール選挙区にお ける補欠選挙を行わないことを決定した。
- 22 日、人民党世俗派 (JD (S)) が BJP 主導の国民民主連合 (NDA) に参加し、2024 年総選挙を含む選挙戦

を共に戦うことが両党のリーダーらにより公式に確認された。

●23日、コヴィンド前大統領を議長とする「一国一選挙」に関するハイレベル委員会は、第一回会合において、国政政党、州政党、インド法制委員会を招待し、下院、州議会、パンチャヤットの同時選挙実施について意見を求めることを決定した。

●25日、クマール・ビハール州首相とヤーダヴ同州副首相は、パトナで行われたインド大衆連盟 (Bharatiya Jana Sangh) の元メンバー及び、RSS思想家であるディーンダヤル・ウパディヤヤの生誕記念行事に出席した。

●25日、全印アンナ・ドラビダ進歩連盟 (AIADMK) は、チェンナイで開催された同党のハイレベル会合において「全会一致」で、BJP率いる国民民主連合 (NDA) から離脱し、BJPとの関係を解消することを発表した。

(ジャンムー・カシミール準州)

●5日、ジャンムー・カシミール準州に特別な地位を与えた憲法370条に関する審理が終了し、最高裁は2019年8月の同条文破棄と、それに続く2つの連邦準州への再編を争った一連の請願の判決を留保した。

●22日、370条破棄後、4年以上自宅で軟禁されていたミルワイズ・ファルーク・フーリヤット協議会議長が解放され、スリナガルのジャミア・マスジッドで金曜礼拝を行った。

(パンジャブ州)

●5日、パンジャブ州議会の kongress 党幹部たちは、総選挙における庶民党との同盟に強く反対した。

●6日、庶民党所属のマン・パンジャブ州議会議員は、2024年総選挙において kongress と協力せず13議席全てを単独で争うと述べた。

(アッサム州)

●4日、サルマ・アッサム州首相は、シャー内相と面会し「国軍特別権限法 (ASFPA)」を州内8地区から完全撤廃するためのロードマップについて議論した。

(タミル・ナド州)

●3日、タミル・ナド州首相の息子ウダヤニディ氏による「サナータナ・ダルマ」の根絶を呼びかける発言をめぐり、シャー内相はヒンドゥー教を侮辱していると非難し、BJP側は発言をヘイトスピーチであるとして最高裁に訴えている。

(テランガナ州)

●4日、kongress は9月17日ハイデラバードにおける集会で、テランガナ州議会選挙キャンペーンを展開する計画であり、福祉制度を中心とした「5つの保証」を公約に据えると発表した。

(オディシャ州)

●31日、パトナイク・オディシャ州首相は、ビジュ人民党 (BJD) 幹部に対し、「早期選挙」に備えるため選挙準備態勢の見直しを要請した。

(ラジャスタン州)

●6日、kongress はラジャスタン州議会選挙のために世論調査委員会を含む複数の委員会を設置した。

●28日、シャー内相とナッダ BJP 総裁は、ラジャスタン州の会合で地元の政治家たちと同州議会選挙に向けた戦略を議論し、意見の相違を脇に置くよう求めた。

(マディヤ・プラデシュ州)

●6日、マディヤ・プラデシュ州において開催中の「ジャン・アシルワド・ヤトラ (大衆からの祝福キャンペーン)」が襲撃された。その翌日、チョウハン同州首相は襲撃の背景には kongress がいると述べた。

●25日、BJP は、マディヤ・プラデシュ州議会選挙の第2候補者リストに、トーマル農業連邦大臣、クラステ農村開発閣外大臣、パテル食品加工閣外大臣を含む3人の連邦大臣と数人の国会議員を加えた。

(デリー準州)

●7日、BJPは、2024年総選挙に向けてオンライン・オフライン双方で支持基盤拡大を目指すため「ミッション2024」を始動し、デリーにてボランティアの募集を開始した。主に、ソーシャルメディアにおけるボランティアの勧誘が目的であり、ユーチューバーによるモディ政権の実績の拡散が歓迎された。

(マニプール州)

●2日、マニプール州政府は、インパールに住む最後の10世帯のクキ族を避難させた。

●6日、最高裁は、マニプール州政府に対し違法武器の所有者や所属を問わず、武器庫を把握、回収するための計画を策定するよう勧告した。

●8日、マニプール州テンノウパル地区において2件の発砲事件があり、2人が死亡、50人近くが負傷した。治安当局によると、ナガ族居住地域を襲撃する新たな傾向が見られるという。

●9日、紛争が絶えないマニプール州において、同州内閣は、連邦政府に対し軍特別権限法 (ASFP) をさらに6か月延長するよう求めている。他方、アッサム州内閣は10月1日から同州全域をAFSPAの指定「動乱地域」から完全に除外することを連邦政府に要求している。

●21日、マニプール警察特殊部隊に逮捕された5人の若者の無条件釈放を要求するメイティ族の女性たちによる道路封鎖をはじめとするデモ運動を鎮圧するために、治安部隊が催涙弾を発射し、少なくとも30人が負傷した。

●22日、インパールの裁判所は、銃器保持を理由に、不正行為 (防止) 法 (UAPA) 及び国家機密保護法 (Official Secrets Act) に基づき逮捕した5人の男性の保釈を認めた。

●23日、シン・マニプール州首相は、同州政府はインド・ミャンマー国境沿いの自由移動制度 (FMR) を恒久的に停止するよう中央政府に要請したと述べ、「不法移民」を抑制するための措置であるとした。

●26日、マニプール州政府は、2人の学生が武装勢力に殺害された事件で再燃した新たな抗議行動を受け、携帯のインターネットサービスを5日間停止した。数多くの学生が街頭に立ち、犠牲者のための正義を要求して、シン同州首相の自宅に向かって行進した。

(トリプラ州)

●11日、トリプラ州の地域政党であるティプラランド州党 (TSP) は、ティプラ・モサ党 (TMP) との決別を発表した。

(ナガランド州)

●12日、与党連合NDPに所属する国民民主進歩党 (NDPP) 率いるナガランド州議会は同州を統一民法 (UCC) 適用から除外する決議を全会一致で可決した。

(アンドラ・プラデシュ州)

●8日、テルグ党 (TDP) 党首であり、ナイドゥ前アンドラ・プラデシュ州首相が、アンドラ州警察により汚職の疑いで逮捕された。

(カルナータカ州)

●10日、人民党世俗派 (JD (S)) 党首のゴウダ元印首相は、2024年総選挙に際し、同党はカルナータカ州におけるBJPとの同盟締結に向けた協議を行ったが、議席配分のコンセンサスはまだ得られていないと明らかにした。

(マディヤ・プラデシュ州、チャッティースガル州)

●8日、野党連合I.N.D.I.Aのムンバイ会合において、2024年総選挙に向け早期の議席配分の発表を合意した数日後、庶民党はマディヤ・プラデシュ州とチャッティースガル州の州議会選挙を単独で戦うことを決定し、両州のそれぞれ10人ずつの候補者を発表した。

(マハーラーシュトラ州)

●10日、パトレ・コングレス・マハーラーシュトラ支部長は、「9月18日から22日に開催予定の臨時国会にお

いて、連邦政府は、ムンバイを連邦直轄領として宣言し、マハーラーシュトラ州の他の地域から引き離すだろうと述べた。

(ミゾラム州)

●28日、ミゾラム州政府は、連邦政府の指示を無視し、州内のミャンマー難民の生体認証データを収集しないと宣言した。

(チャッティースガル州)

●25日、 kongressのラーフル・ガンディー議員は、チャッティースガル州開発のために、2023年社会経済調査からホームレス世帯と、連邦政府の現行スキームの待機リストにある60万世帯以上の世帯に住宅手当や失業手当を支給する新スキーム「Chhattisgarh Gramin Awas NYAY Yojana」を発表した。

(カルナータカ州、タミル・ナド州)

●カルナータカ州及びタミル・ナド州で、カヴェリー川の水の分配をめぐる抗議デモが発生。農民たちは様々な方法で反発を示した。150年の歴史を持つこの紛争をめぐり、両州では一触即発の抗議デモが行われ、日常生活に混乱が生じたが、暴力や破壊行為は報告されていない。デモの扇動者たちは隣接する両州で集会を開き、両州政府は自らの立場を堅持し、野党が本問題を政治利用していると非難した。

2 外交

(印・ASEAN 関係)

●6日から7日にかけて、モディ首相は、インドネシアのジョコ・ウィド大統領の招待により、第20回ASEANインド首脳会議及び第18回東アジア首脳会議に出席するためインドネシア・ジャカルタを訪問した。

(印・G20 関係)

●9日から10日まで第18回G20首脳会議がデリーで開催された。

(印・モーリシャス関係)

●8日、モディ首相はジャグナット・モーリシャス首相とG20首脳会議のサイドラインで会談。

(印・バングラデシュ関係)

●8日モディ首相はG20首脳会議のために訪印中のハシナ・バングラデシュ首相と会談。両首脳は政治・安全保障協力、国境管理、貿易・連結性、水資源、開発協力、文化及び人物交流を含む二国間協力について議論した。

(印・米関係)

●モディ首相はG20首脳会議のために訪印中のバイデン米大統領と会談。バイデン氏は大統領としては初めて訪印。モディ首相は、民主主義の価値観を共有し強固な人的関係を有する印米包括的戦略的グローバル・パートナーシップをさらに強化することへのバイデン大統領のコミットメントに感謝した。

(印・英関係)

●9日、モディ首相はG20首脳会議出席のために初めて訪印したスナク英首相と会談。両首脳は印英包括的戦略的パートナーシップ及びロードマップ2030について、特に経済、防衛・安全保障、テクノロジー、気候変動等を含む様々な分野で二国間関係が発展していることを満足の意とともに確認し、また、国際的及び地域的な重要課題と相互利益について意見交換した。

(印・伊関係)

●9日、モディ首相はメローニ伊首相とG20首脳会議のサイドラインで会談。メローニ首相の訪印は、印伊関係が戦略的パートナーシップに引き上げられた本年3月に続き二回目。

(印・加関係)

●10日、モディ首相はトルドー加首相とG20首脳会議のサイドラインで会談。会談の中でモディ首相は両国関係が共通の民主主義的価値観、法の支配の尊重及び人的関係により支えられていることを強調するとともに、カナダでの反インド的活動について強い懸念を表明した。

(印・ブラジル関係)

●10日、モディ首相はシルバ・ブラジル大統領とG20首脳会議のサイドラインで会談。会談の中でモディ首相は、ブラジルの来年のG20議長国としての成功を祈念し、インドの支援を約束した。

(印・コモロ関係)

●10日、モディ首相はアスマニ・コモロ大統領とG20首脳会議のサイドラインで会談。アスマニ大統領はモディ首相によるアフリカ連合をG20の正式なメンバーするイニシアティブと取組に謝意を表明。

(印・韓関係)

●10日、モディ首相は尹・韓国大統領とG20首脳会議のサイドラインで会談。同大統領はチャンドラヤン・ミッションの成功に祝意を表明した。

(印・トルコ関係)

●10日、モディ首相はエルドアン・トルコ大統領とG20首脳会議のサイドラインで会談。両首脳は貿易・投資、防衛・安全保障、民間航空及び船舶輸送について議論した。

(印・ナイジェリア関係)

●10日、モディ首相はティヌブ・ナイジェリア大統領とG20のサイドラインで会談。同大統領は、アフリカ連合をG20の正式メンバーとしたこと、及びグローバル・サウスの利益を促進したことについてモディ首相に謝意を表明した。

(印・オランダ関係)

●10日、モディ首相はルッテ・オランダ首相とG20首脳会議のサイドラインで会談。会談の中でルッテ首相はチャンドラヤン・ミッションの成功を祝うとともにアディティヤ・ミッションの成功を祈念した。

(印・独関係)

●10日、モディ首相はショルツ独首相とG20首脳会議のサイドラインで会談。ショルツ首相の訪印は本年2月の国賓以来2度目。

(印・EU関係)

●10日、モディ首相はミシェル欧州理事会議長及びライエン欧州委員会委員長とG20首脳会議のサイドラインで会談。三首脳は印EU戦略的パートナーシップについて、次回小脳会議、FTA交渉、気候変動及びLiFE、デジタル・テクノロジー及び貿易等様々な側面について議論した。

(印・仏関係)

●10日、モディ首相はマクロン仏大統領とG20首脳会議のサイドラインで会談。同大統領の訪印は、印仏戦略的パートナーシップの25周年を記念した本年7月の仏国祭日の際の国賓としてのモディ首相の訪仏の後に行われた。

(印・サウジアラビア関係)

●11日、ムルム大統領はモハンマド・サウジアラビア皇太子及びサウジアラビア首相と大統領府で会談、晩餐会を主催した。

(印・BRICS 関係)

●21日、BRICS 諸国の外務大臣が国連総会のサイドラインで面会。ジャイシャンカル印外務大臣はオンラインで参加。

(印・国連総会関係)

●22日、ジャイシャンカル外相は9月22日から26日まで第78回国連総会に出席するためにニューヨークを訪問。

3 日印関係

●9日、モディ首相は日本の岸田総理とG20首脳会議のサイドラインで会談した。会談の中で両首脳は互いに一年を通じてG20及びG7の議長国であることに重きをおきながら、両国間で建設的な対話が行われたことを確認した。

9月9日(土曜日)、現地時間午後2時43分(日本時間午後6時13分)から約20分間、G20ニューデリー・サミットに出席するためインドを訪問中の岸田文雄内閣総理大臣は、ナレンドラ・モディ・インド首相(H.E. Mr. Narendra Modi, Prime Minister of India)と日印首脳会談を行ったところ、概要以下のとおりです。

1. 冒頭、モディ首相から、岸田総理のインド訪問に対する歓迎の意と、G20ニューデリー・サミットの成功に向けたこれまでの日本の協力に対する謝意が述べられました。また、岸田総理のリーダーシップの下、日本が経済成長を遂げていることについて、インド国内でも高く評価されている旨述べました。

これに対し、岸田総理から、モディ首相のG7広島サミットへの参加に改めて感謝の意を伝えるとともに、G7広島サミットの成果を繋げ、G20ニューデリー・サミットの成功に貢献したい旨述べました。また、岸田総理から、先般のインド月面探査機チャンドラヤーン3号の歴史的な月面着陸成功に対する祝意を伝え、両首脳は、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の維持・強化などの他、宇宙分野を含む先端技術分野においても連携していくことで一致しました。

2. 岸田総理から、近年、日印関係は順調に進展している旨述べた上で、昨年3月に掲げた今後5年間における対印官民投融資5兆円目標の達成に向け、インドにおける投資環境改善につき協力を要請しました。

また、両首脳は、日印両国の旗艦プロジェクトである高速鉄道事業について、4,000億円の第5期円借款の供与が進められていることを歓迎しました。

3. 両首脳は、本年3月に合意した「日印観光交流年」について、様々な取組が行われていることを歓迎し、引き続き両国で盛り上げていくことで一致しました。

また、岸田総理から、日印関係を担う優秀な行政官が日本へ留学するための「人材育成奨学計画(JDS)」の立ち上げについて調整を進めていることを伝達したのに対し、モディ首相より謝意が述べられました。

4. 岸田総理から、今般開始したALPS処理水の海洋放出に関する日本の立場を説明しました。

5. 両首脳は、両国間の更なる関係強化に向け、協力していくことで一致しました。

●13日、日本政府は東京にて第5回日印サイバー協議を主催した。インド側代表はサイアウィ外務省サイバー外交政策局長、日本側代表は石月外務省国際安全保障・サイバー政策担当大使。

(了)

新規法人会員のご紹介 New Corporate Members

2023年9月6日より10月13日までに、下記企業様が一般法人会員にご入会されました。

- 一般社団法人 ART OF LIVING 様
- 株式会社帝国ホテル様
- 株式会社ニトリホールディングス様
- G-8 INTERNATIONAL TRADING 株式会社様
- 鈴与株式会社様

ご入会ありがとうございました。

新刊書紹介 Books Review

§ 日印協会発行『現代インド・フォーラム』2023年秋季号 No. 59

「現代インド・フォーラム 2023年秋季号 No.59」は、10月10日より一般公開しております。下記リンクをクリックするか、または右下のQRコードを読み込んで日印協会ホームページにてごらんください。

今号では、「インドの宇宙開発と日印協力」を特集し、下記3論文を掲載しております。

1. **インドの宇宙政策とは何か**
岩本（大工原） 彩
(株式会社アストロスケール政策・政府渉外部長)
2. **地政学的に動揺する新しい世界における宇宙の安全保障**
ラージェスワリ（ラジ）・ピッレー・ラージャーゴパラン
(オブザーバー・リサーチ財団 (ORF)
安全保障・戦略・技術センター長)
3. **日印宇宙産業エコシステムに関する比較分析**
プラサード・ナーラーヤン (satserch 社共同創設者)

本誌に関してご意見・ご感想等ございましたら、日印協会までご連絡ください。



§ 『インド ―グローバル・サウスの超大国』 (中公新書 2770)

著者：近藤正規 出版社：中央公論新社 9月25日発行
価格：1,078円 (税込) ISBN 978-4-12-102770-2

「お待ちしていました！」と献本いただいたその場で申し上げてしまった。最近インドに関するいずれも秀逸な本が相次いで出版され、インドに関心が集まってきている。その背景には、人口が中国を抜いて世界一になったこと、GDPが英仏を抜き世界5位、複雑化する国際政治のなかで独自の外交路線を貫きつつも、G20の議長をしっかりと務め上げた。科学技術面では、IT産業のみならず宇宙開発では、月のしかも南極に軟着陸という離れ業など話題も何かと多く、最も注目を集めている国の一つだ。日印協会の理事を務められたインド経済学者の近藤先生にもそろそろと思っており、時宜を得たタイミングだからである。

全体にやさしく丁寧に解説され、特に第2章のインド経済の変遷と第3章の経済の担い手は大変参考になった。また、直近のモディ首相の訪米、G20の議長国として、タイミング的に首脳会議には間に合わなかったものの、分析およびグローバル・サウスとの位置づけを考察し、米・中・ロとの外交などインド外交の奥義にも踏み込んでいる。

他方内政面では、成長の陰に依然存在する貧困・宗教・男女間・カーストなどの格差問題にも、その歴史的背景とそれに基づく考察が丁寧になされている。

第7章で、日系企業進出の過去を実例とともに振り返り、その課題分析をもとに今後どうあるべきかの考察は大変興味深い。

さらに最後に、わが菅義偉日印協会会長も事あるごとに取り上げられている、日印間の人的交流促進について、日頃、大学で身近に若年層と接しておられる立場ならではの分析と方向付けの示唆もあり、今後の日印関係を側面からもさらに高めるための提案がおもしろい。

著者は自ら「入門書」とおっしゃっているが、決してそうではなく、現地に赴いたことを踏まえ、専門性に満ちた解説が随所に見られる。読み易さに工夫がされており、誰でも入り易いという点で入門書といえるかもしれない。(日印協会副理事長 西本達生)



イベント紹介 Japan-India Events

◆ 10月31日 日印協会主催 「天竺茶話会」開催

新企画 個人会員限定 第一回『天竺茶話会』のご案内です。

あらかじめテーマを決めさせていただき、大学でゼミなどのご経験がある理事に講師をお願いし、初めに2～30分程度話し、それについてお互いに話し合うというかたちをとりたいと考えています。

「超話題作！映画『RRR』で知るインドの近現代史」

講師：笠井亮平日印協会理事

日時：10月31日（火）15:00～16:30

場所：協会事務所（千代田区麹町1丁目6 麴町保坂ビル6F）会議室

参加費：お茶菓子とお茶代 1,000円

参加申し込み：右のQR、または下記リンクからご登録ください。

または、メールやお電話でも受け付けております。

<https://forms.gle/6WaYhJmjE1fkXdwv8>

定員に達し次第締め切り、参加可否を別途ご連絡します



◆ 10月31日 インド大使館主催 「ナショナル・ユニティー・デー」開催

インド初代内務大臣サルダール・ヴァラブバイ・パテルの生誕記念日を記念するナショナル・ユニティー・デーを祝いましょう！

日時：2023年10月31日 17:00 - 18:00

参加費：無料（要事前登録）先着順

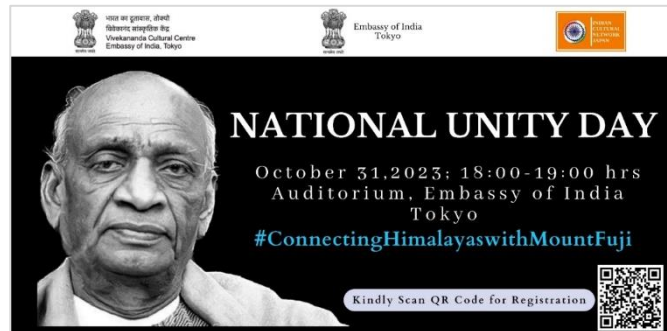
会場：インド大使館 ヴィヴェークアナンダ文化センター 講堂

住所：インド大使館 千代田区九段南2-2-11
（最寄り駅：九段下駅 2番出口より徒歩5分）

参加登録リンク：

<https://forms.gle/8BNSYTMDLbrd6iqNA>

・13歳未満のお子様のご入場はご遠慮下さい。



◆ 11月1日(水) インド大使館主催 「JAYARAM」 舞台公演

スートラ財団がガジェンドラ・クマール・パンダ師と共同で制作した完全オリジナルのオディッシー作品「JAYARAM」は、叙事詩「ラーマーヤナ」の英雄ラーマ大王の物語を舞台化したものです。詳しくは下記をごらんください。

申し込みはQRコードよりお願いします。

JAYARAM
A Homage to Lord Rama
Hero of the Ramayana

Concept /Artistic Director-Guru Gajendra kumar Panda & Padma Shree awardee
Datuk Ramli Ibrahim
SUTRA FOUNDATION, Malaysia

An entirely original odissi production by Sutra Foundation in collaboration with Guru Gajendra Kumar Panda, Jaya Ram brings to the stage the story of Lord Rama, hero of the epic Ramayana.

Revolving around Lord Rama, the work references primarily Ram Leila and Ram Natakam, but also draws inspiration from genres such as Daskathia and Saki Nata, traditional forms from the same region.

Jaya Ram can be viewed as a collage of primary episodes of the Ramayana which are familiar to the general audience. The images are then positioned within the context of odissi traditional formats of Mangalacharan, Sthai, Pallavi etc.

The work centers on Lord Rama, and attempts to elaborate on the aspects of his personality as mahapurusha, the highest form of Purusha, as described by Valmiki in his Ramayana.

November 01, 2023 / 5:30PM-7:00PM
Auditorium, Embassy of India Tokyo

Kindly Scan QR Code for Registration

indian_cultural_centre_japan | ICCR in Japan | Twitter @ICCR_Japan | ICCR IN JAPAN

◆ 11月14日(土) 第22回「東京ディワリフェスタ西葛西」開催

食とダンスで発散！西葛西の秋祭り「東京ディワリフェスタ西葛西」が開催されます。インド古典舞踊やインド現代舞踊、インドの子供達によるステージやインドの模擬店等が楽しめます。入場無料。

日時：11月4日(土) 10:00～16:30

場所：西葛西新田6号公園（江戸川区自由広場）

詳細は、「東京ディワリフェスタ西葛西」のFacebookをご覧ください。

ディワリフェスタ 西葛西
-Diwali Festival at Nishikasai
2023.11.4sat
開催時間 AM10:00～PM4:30

हैप्पी दीवाली!

食とダンスで発散！西葛西の秋祭り
西葛西新田6号公園（江戸川区自由広場）

自印国庫友好館
入場無料
Admission Free

◆ 日印協会主催 「インド法律セミナー」を全5回で1月～5月までの間に開催します

詳細は改めてメール、ホームページ等でお知らせいたします。

会員交流会のお知らせ

Members Gathering

会員メールでもご案内を差し上げておりますが、コロナ禍でやむを得ず休止していた
会員交流会を4年ぶりに下記の通り開催致します。

会員の皆様が、インドやインドへの思いについて語らいあい、親睦を深める場としていただ
ければ幸いです。奮ってご参加下さい。

◇ **日時：2023年11月20日(月) 18:00~20:00**

Date : Monday 20th November, 2023

◇ **会場：新宿中村屋 レストラン グランナ**

Venue : Restaurant Granna, Nakamura

東京都新宿区新宿三丁目26番13号 新宿中村屋ビル 8階

[JR線をご利用の方] 新宿駅東口から徒歩2分

[東京メトロ丸ノ内線をご利用の方] 新宿駅A6出入口直結

◇ **参加費(Participation fee) 会員お一人様 8,000円**

◇ **定員：80名(先着順)**

◇ **参加申し込み：右下QRコードを読み込むか、下記リンクより
ご入力ください。**

<https://forms.gle/PkeH24j2s2dHsJ4EA>

またはメール、お電話でお申込みください。



掲示板 Notice

< Facebook に「日印協会 個人会員限定グループ」を設立いたしました！ >

公益財団法人日印協会の個人会員の皆様だけの専用コミュニティです。

インドに関する情報共有やメンバー同士のコミュニケーションを深めるための場として活用していただければと思います。右QRコードより参加申し込み可能です。



次回月刊インド 11月 12月合併号の発送は、12月中旬を予定しております。

< 編集後記 >

コロナでやむを得ずお休みしていた日印協会の様々なイベントですが、やっと再開しました。

新企画としては、個人会員限定ではございますが、協会会議室において少人数で開催する「天竺茶話会」。

インドに関するあらゆるジャンルの話題について、参加者が話し合うことによって互いにインドに対する理解を深める場を提供いたします。大学でゼミなどのご経験がある理事に講師をお願いし、はじめに20～30分程度話し、それについてお互いに話し合う企画で、定期開催を予定しておりますので、今後の「天竺茶話会」もご期待ください。

また、インド商工会議所連盟FICCI国会議員フォーラム代表団が来日されましたことを記事にいたしましたが、つい先日は、野生司香雪の仏伝壁画がある初転法輪寺を管理している、マハボディ・ソサエティからのお客様も事務所を訪問されて、野生司香雪の仏伝壁画保全について日印協会ご相談されました。確実に海外との文化事業やビジネスの往来もコロナ以前より盛んになっているのを実感いたします。

11月20日には、会員のみなさまに会員交流会でお会いできるのを楽しみにしております。ぜひご参加ください。ね。(編集子)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。



随時会員募集中



日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の3名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人・個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費: 個人	1口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
学生	1口(4,000円)から		学生 1,000円
一般法人会員	1口(100,000円)から		法人 5,000円
特別法人会員	1口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド 2023年10月号 (2023年10月20日発行) 発行人 齋木昭隆 編集人 宮田加奈子
発行所 公益財団法人日印協会
〒102-0083 東京都千代田区麹町 1-6 麹町保坂ビル 6階
Tel: 03-6272-4408 Fax: 03-6272-4135 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: <https://www.japan-india.com/>